

地域文化資源の鑑賞が地域の人々への愛着と信頼に及ぼす影響

—地域文化資源としての大坂画壇に焦点を当てて¹—林 直保子²

【要 約】

本研究では、地域文化資源として「大坂画壇」を取り上げ、大坂画壇の鑑賞が鑑賞者の大阪と大阪人への愛着、大阪文化への興味に与える影響を検討した。調査には近畿圏在住の57名の男女が参加した。各参加者は、計6回の調査セッションに参加し、毎回1名の大坂画壇の画家の作品（超高精細デジタル画像）を鑑賞した。構造方程式モデルによる検討の結果、大坂画壇鑑賞後の大坂画壇の評価は、大阪への愛着に有意な影響を及ぼしていなかったが、大阪文化への興味には有意な正の効果を及ぼしていた。また、大坂画壇の評価は、大阪人への愛着に正の効果を持っており、さらに、大阪人への愛着は、大阪人への信頼に対して有意な正の効果をもっていた。

キーワード：地域文化資源、大坂画壇、信頼、地域への愛着

0. はじめに

文化芸術は、社会的包摂機能、および社会関係資本の形成支援機能をもつとされ(文化庁2011)、こうした機能に着目した地域課題解決のためのプラットフォーム形成の理論、実践研究が進展しつつある³。本論文は、文化芸術のこうした機能のうち、特に、地域文化資源が人々の地域への愛着を醸成し、さらには社会関係資本の形成基盤を提供する可能性について検討することを目的としている。具体的には、本論文は、地域文化資源として「大坂画壇」を取り上げ、「大坂画壇」の鑑賞が、大阪文化への興味を促進すること、および大阪への愛着(以下、「まちへの愛着」)、大阪に暮らす人々への愛着(以下、「大阪人への愛着」と信頼(以下、「大阪人への信頼」)の醸成につながる可能性について検討する。「大坂画壇」とは現在の大阪市に限らず、広くその周辺を含む範囲で、16世紀から20世紀に至るおよそ450年間にわたり存在した画家集団である(中谷2011)⁴。大坂画壇の知名度は江戸画壇や京都画壇に比べ低く、メディアでも取り上げられることが少ないため、一般鑑賞者が大坂画壇を鑑賞する機会自体がほとんどなかった⁵。

¹ 本稿に報告する調査1は分林瑤子(2015年度心理学専攻卒業生)との共同研究、調査4は奥江佐知与(2016年度心理学専攻卒業生)との共同研究として実施した。また、調査2、調査3の実施にあたり、今柄奈々氏に多大なご協力をいただいた。記してここに感謝する。本稿はこれら4調査のデータを林が整理・再分析した上で執筆したものであり、本稿におけるミスなどの責任はすべて林にある。

² 関西大学社会学部教授

³ 関西大学・拠点形成支援経費の助成を受けた「地域文化資源をプラットフォームとした地域共同活動の創生拠点形成」研究(平成2016年度～2017年度:代表・与謝野有紀)において、この点に関する理論、実践研究が推進された。

⁴ 中谷(2011)によると、「大坂画壇」という言葉は、1981年に「近世の大坂画壇」展が大阪市立美術館で開催されたときにつけられた名称であり、その際、武田恒夫は「大坂画壇」の時代を「18世紀から19世紀中葉」としていたとされるが、本稿では中谷(2011)の大坂画壇の定義に従うこととする。また、近代絵画については「大阪画壇」の用語を用いる場合が多く、その点で本調査に用いた菅楯彦作品は「大阪画壇」に属するが、本稿では一貫して「大坂画壇」の表記を用いる。

⁵ その一方で、大英博物館をはじめとする欧米の美術館が大坂画壇を高く評価し、作品を蒐集しているという現状があ

本研究は、大阪に暮らす人々の間でも知名度が高くない大坂画壇を用いて、優れた地域文化資源との接触が地域への愛着の促進を通して社会関係資本の形成基盤を提供する可能性を検討する。

1. 本研究の目的

本研究では、第一に、美術的にすぐれた大坂画壇の作品を鑑賞することで、大阪のまちと大阪人への愛着が増すかどうかを検討する。心理学では、愛着(attachment)は、「特定の対象に対する特別の情緒的結びつき」(心理学辞典 1999)と定義される。また、環境心理学では、場所愛着(place attachment)の研究が多数行われており、Hidalgo and Hernandez (2001)はそれらの研究を概観した上で、場所に対する愛着は、「人と特定の場所との間の情緒的な絆やつながり」と定義している。ここでは、大坂画壇の鑑賞が、大阪への場所愛着と大阪人への愛着を促進するかどうかを検討する。なお、本研究では、鑑賞者本人の大阪との関係性の影響も検討する。具体的には、大阪に長く居住したことのある人とそうでない人の、大阪と大阪人への愛着の程度の比較を行う。

本研究の第2の目的は、大坂画壇鑑賞による大阪文化に対する興味への影響を検討することにある。具体的には、大坂画壇を鑑賞することで、鑑賞者の大阪文化に対する興味が増すかどうかを検討する。また、大坂画壇の鑑賞による大阪文化への興味の増加は、大阪に長く住んでいる鑑賞者の方が、その他の鑑賞者より大きいのかも併せて検討する。

本研究の第3の目的は、大阪の「まち」への愛着が、大阪の「人」への愛着を増す可能性を検討することにある。Payton & Fulton (2005) は、米国ミネソタ州の鳥獣保護区を訪れた人々を対象とした調査研究を行い、地域への感情的愛着が、その地域での個人間の信頼を促進すると結論している。ただし、Payton & Fulton(2005)で個人間の信頼の測定のために用いられている項目群には、地域における他者への信頼を測定する項目とコミュニティへの帰属意識についての項目が混在しており、「信頼」と「人への愛着」の区別が曖昧なままとなっている。本研究では、愛着と信頼を区別した上で、大坂画壇の鑑賞が、「大阪の場所」と「大阪の人」への愛着を生み出すかどうかを検討する。

本研究の最終的な目的は、「大阪の人」への愛着が「大阪の人」への信頼を促進する可能性を検討することにある。ここで、「大阪の人」への信頼は、「大阪人一般」への信頼であり、「カテゴリー的信頼」(与謝野ほか 2015)である。その意味で、家族や友人、知人など、その対象についての個別的情報に基づく「個別的信頼」とは区別しなければならない。同様に、「大阪の人」への愛着も、特定の「大阪の人」への愛着ではなく、「大阪人一般」への愛着であり、「カテゴリー的愛着」である。地域文化資源が地域におけるカテゴリー的愛着を通じてカテゴリー的信頼を生み出すかどうかという問については、これまで実証的な研究がほとんど行われてきておらず、そのため

る(『朝日新聞』2016.5.4 朝刊3面)。日本国内において、江戸画壇や京都画壇に比べ大坂画壇の知名度が低い美術史的な理由については、中谷(2010)に詳しい。

本研究は「萌芽的研究」に位置づけられる。

2. 調査の概要

本調査は、4回に分けて実施した。調査日時、場所等は調査毎に異なるが、調査手続きは、一部の調査項目を除き同一である。

調査時期:調査時期は、調査1)2015年11月～12月、調査2)2016年3月～7月、調査3)2016年5月～6月 調査4)2016年10～11月であった。

回答者:近畿地方に在住する10代～80代の男女57名(男性13名、女性44名)であった。調査毎の回答者の内訳は、調査1)大阪府内のカフェの常連客16名、調査2)奈良県・大阪府におけるカルチャー教室生徒14名、調査3)大阪市内商店街関係者6名、調査4)大阪府内ショップ定員21名であった。調査回答者の年齢と性別をTable 1に示した。

Table 1 調査回答者の年齢と性別

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	計
男性	0	4	2	1	0	4	0	2	13
女性	3	18	5	7	3	6	2	0	44
合計	3	22	7	8	3	10	2	2	57
%	5.3	38.6	12.3	14.0	5.3	17.5	3.5	3.5	100.0

調査方法:各回答者は、Table 2に示す6回の調査セッションに参加した。調査は、1日に1つのセッションのみ行われた⁶。初回と最終回に「大阪と大阪人への愛着、大阪人への信頼、大阪文化への興味」について同一の質問項目に回答した。また、初回には「日ごろの文化活動について」、最終回であるセッション6では「全体を通しての鑑賞の感想」と「今後の美術鑑賞について」の項目に回答した。ただし、「全体を通しての鑑賞の感想」と「今後の美術鑑賞について」の項目は調査2～4でのみ用いられた。セッション2～6では、毎回大坂画壇の画家1名を取り上げ、調査者がその画家と作品について簡単に紹介した後、回答者自身がA3サイズのタッチパネルPCを操作して絵画を鑑賞し、鑑賞後にA4一枚の調査票に回答した。作品はすべて1200dpiの高精細でデジタル化されており、名画ナビゲーションシステム(日立製作所デジタルイメージングシステム製)により提示された⁷。回答者は自らタッチパネルを操作し、絵画画像を拡大し、細部まで鑑賞することができた。鑑賞時間については特に制限しなかった。

⁶ セッション間隔は、参加者により異なった。調査1、3、4では、基本的に2～3日に1セッションのペースで進められた。調査2では、セッション間隔は1～2週間であった。

⁷ 本研究で用いた作品はすべて関西大学図書館所蔵であり、調査に使用したデジタル画像は関西大学創立130周年記念特別研究費(なにわ大阪研究)(2014年度～2016年度、代表:林直保子)の助成により作成したものである。調査で提示する作品順序については、美術史的に古いものから新しいものへと順に提示することよりも、モノクロなものから色彩豊かな作品、掛け軸から絵巻物という形で、鑑賞の対象として質的な変化をもたせることを重視して配置した。

Table 2 調査セッションの構成

Session	調査内容・作者・作品
1	調査：大阪のまちと大阪人への愛着、大阪人への信頼、大阪文化への興味、出身都道府県、居住期間、日頃の文化活動
2	岡田米山人（「山水図」）鑑賞・調査
3	岡田半江（「米法山水図」、「大川納涼図」）鑑賞・調査
4	木村兼葭堂（「花蝶之図」、「大坂文人合作扇面」）鑑賞・調査
5	大岡春ト（「浪花及澱川沿岸名勝図巻」）鑑賞・調査
6	菅楯彦（「きつねのよめいりの巻」）鑑賞・調査 調査：全体を通しての鑑賞の感想（調査2～4のみ）、大阪のまちと大阪人への愛着、大阪人への信頼、大阪文化への興味、今後の美術鑑賞（調査2～4のみ）

3. 調査結果

3-1 大阪と大阪人に関する変数および作品鑑賞後の感想と大坂画壇の評価

セッション1とセッション6では、調査対象者はTable 3に示す大阪と大阪人についての同一の質問項目(5件法)に回答した。以下の分析では、大阪の「まち」への愛着については2項目の平均値を、大阪文化への興味については3項目の平均値を用いる。

Table 3 大阪と大阪人に関する項目

大阪へのへの愛着	大阪の風景に愛着を感じる 大阪の街が好きだ	$\alpha=.82$
大阪文化への興味	大阪の歴史に興味がある 大阪の美術作品に興味がある 大阪の文化についてもっと知りたい	$\alpha=.87$
大阪人への愛着	大阪人の人柄に親しみを感じる	
大阪人への信頼	大阪の人は信頼できる	

セッション2からセッション6の絵画鑑賞後の質問項目は、Table 4に示す通りである。「タッチパネルを使った鑑賞の感想」は3項目、「作品の感想」は6項目の平均値を分析に用いた⁸。

Table 4 作品鑑賞後の感想の質問項目

⁸ タッチパネルを使った鑑賞の感想3項目の信頼性(α)は、0.682(岡田半江)から0.813(菅楯彦)の範囲であった。また、作品の感想についての6項目の信頼性(α)は、0.749(岡田米山人)から0.910(木村兼葭堂)の範囲であった。

タッチパネルを使った鑑賞の感想	タッチパネルでの鑑賞を楽しめた 作品の細部まで見ることで興味が増した 自分で操作して見ることによって作品への興味が増した
作品の感想	作品についてもっと知りたい 作家についてもっと知りたい 作品の画風に魅かれた この作品は素晴らしかった この作品は美しかった この作品の本物を見てみたい

また、セッション6では、5回にわたる大坂画壇の鑑賞を通して、大坂画壇についてどのような感想をもったかについて、Table 5 に示す5項目で回答を求めた。これら5項目の平均値を「大坂画壇の評価」とする($\alpha=.90$)⁹。

Table 5 大坂画壇の評価項目

鑑賞した作品の中に、文化的に優れたものがあったと思った 大阪には優れた作品があったと思った このような美術品がある大阪は文化的に豊かであると思う これらの作品をまた見たい これらの作品をもっと人々に知ってほしい

3-2 各セッションにおける作品鑑賞後の感想

タッチパネルを使った鑑賞の感想と作品の感想について、反復測定分散分析を行った。タッチパネルを使った鑑賞については、セッションの主効果が有意であり($F(4,224)=3.71, p<.01, \eta^2_{\text{partial}}=0.062$)、下位検定の結果、セッション1、2、3とセッション4、5の間に有意な差がみられた。Fig. 1 に示すように、タッチパネルを使った鑑賞の平均値は後半のセッションで上昇しており、回答者は次第にタッチパネルの操作に慣れ、超高精細画像による鑑賞に楽しみを覚えるようになっていたと考えられる。また、セッション5で鑑賞した大岡春ト「浪速及淀川沿岸名勝図巻」は、実物は長さ約8メートル幅27センチメートルの絵巻であり、タッチパネルを操作して視点移動しながら鑑賞することによりはじめて作品の全体を把握することが可能となる作品であったことも、タッチパネルを使った鑑賞の評価が上昇した一因と考えられる。

⁹ 大坂画壇の評価は調査1では実施されなかったため、回答数は41であった。

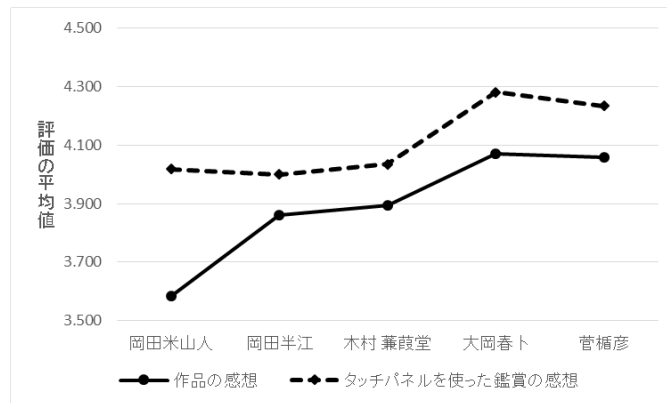


Fig. 1 各セッションにおける作品の感想とタッチパネルを使った鑑賞の感想

各セッションの作品の感想についても同様に反復測定分散分析を行ったところ、セッションの主効果が有意であり $F(4,224)=8.78, p<.01, \eta^2_{partial}=0.136$ 、下位検定の結果、セッション1とセッション2以降の全作品の間に有意な差がありセッション2以降の評価が高かった ($p<.01$)。また、セッション2とセッション4の間に有意な差がみられ、セッション4で評価が高かった ($p<.05$)。¹⁰

3-3 大坂画壇鑑賞による「まち」への愛着と「大阪人」への愛着の変化

「まち」への愛着について、セッションを被験者内要因、これまでもっとも長く居住した都道府県が大阪府であるかどうか(以下、「長期居住」)を被験者間要因とした分散分析を行った¹¹。その結果、長期居住者の主効果が有意であり ($F(1,55)=8.50, p<.01, \eta^2_{partial}=0.134$)、長期居住者の「まち」への愛着が強かった (Fig. 2)。また、回答時期の主効果も有意であり $F(1,55)=5.65, p<.05, \eta^2_{partial}=0.093$ 、初回より最終回で、「まち」への愛着が強かった。長期居住と回答時期の交互作用は有意ではなかった ($F(1,55)=2.03, ns., \eta^2_{partial}=0.036$)。つまり、大阪に長く居住した回答者の方が、その以外の場所に長く居住した回答者よりも大阪の「まち」への愛着が強いこと、および、大坂画壇の鑑賞は、大阪の「まち」への愛着を増す効果あったことが確認された。

大阪人への愛着についても同様に、セッションを被験者内要因、長期居住を被験者間要因として分散分析を行った。その結果、回答時期の主効果 ($F(1,55)=0.244, ns.$)、長期居住の主効果 ($F(1,55)=0.890, ns.$)、回答時期と長期居住の交互作用 ($F(1,55)=0.244, ns.$) のいずれも有意ではなかった (Fig. 3)。

¹⁰ 岡田米山人から岡田半江にかけて評価が上がった理由については、2回目の岡田半江のセッションで調査者により半江が米山人の子であることが解説され、作品についてのメタ情報が追加されたことなどが可能性として考えられる。作品のメタ情報による作品の評価の変化については、本研究の方法では直接に検討することはできないが、美術鑑賞者発掘(アプリシエーター・マイニング)の観点からも興味深いテーマであり、今後の検討が待たれる。

¹¹ 最も長く居住した都道府県が大阪の人は36名、大阪以外の人は21名であった。

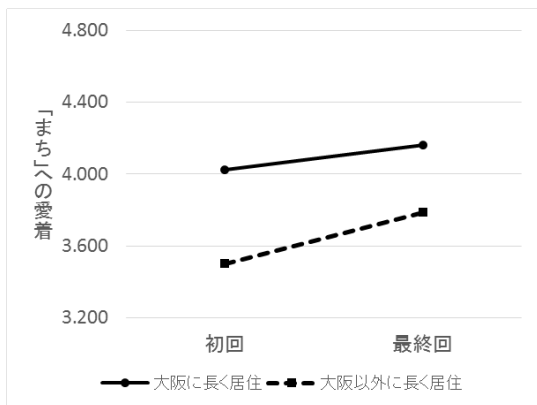


Fig. 2 「まち」への愛着と長期居住

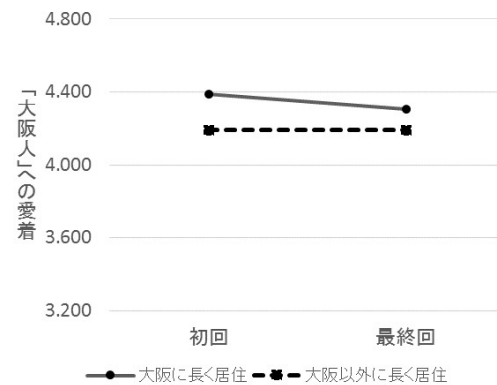


Fig. 3 「大阪人」への愛着と長期居住

3-4 大坂画壇鑑賞による大阪文化への興味の変化

次に、大坂画壇鑑賞前後の大阪文化への興味の変化について検討した(Fig. 4)。その結果、回答時期の主効果が有意であり($F(1,55)=19.41, p<.01, \eta^2_{partial}=0.261$)、長期居住の主効果は有意ではなかった($F(1,55)=0.70, ns.$)。また、回答時期と長期居住の交互作用が有意であり($F(1,55)=4.21, p<.05, \eta^2_{partial}=0.071$)、単純主効果を検討したところ、初回における長期居住の単純主効果は有意ではなく($F(1,55)=2.08, p=.16, \eta^2_{partial}=0.036$)、大阪長期居住者における調査時期の効果が有意であった($F(1,55)=28.30, p<.01, \eta^2_{partial}=0.340$)。

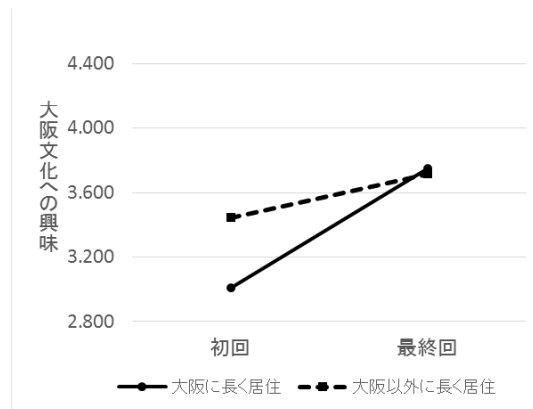


Fig. 4 大阪文化への興味と長期居住

これらの結果は、大阪画壇の鑑賞により、大阪長期居住者の大阪文化への興味上昇したことを意味している。また、初回における長期居住の単純主効果は有意ではなかったものの、大阪文化への興味は大阪長期居住者の方が大阪以外長期居住者よりも低い値をとっており(大阪: 3.009 非大阪:3.444)、大坂画壇鑑賞後の最終回で、両者がほぼ同じ値(大阪: 3.750 非大阪:3.714)となるまで、大阪長期居住者の大阪文化への興味上昇している点が興味深い。5回にわたる大坂画壇の鑑賞は、大阪に馴染みはあるが、その文化にはあまり興味を抱いていなかった長期居住者に、大阪文化への興味を抱かせる効果をもっていたのである。

3-5 大阪の「まち」への愛着、大阪文化への興味、大阪人への愛着と信頼の相関構造

大阪の「まち」と「ひと」への愛着、大阪文化への興味と大阪画壇の鑑賞が大阪人に対する信頼に影響を与える可能性について検討するため、これらの変数の間の関連について構造方程式モデルを構成した¹²。セッション1(Fig. 5)、セッション6 (Fig. 6)ともに、大阪文化への興味と大阪の「まち」への愛着が大阪人の愛着に影響を与え、大阪人への愛着が大阪人への信頼を生むモデルを検討した。またセッション6では、大坂画壇鑑賞後の大坂画壇への評価が大阪文化への興味に与える影響と同時に、大坂画壇の評価が大阪人への愛着に直接に影響するプロセスと「まち」への愛着を介して間接的に大阪人への愛着に影響を与えるプロセスを検討した。

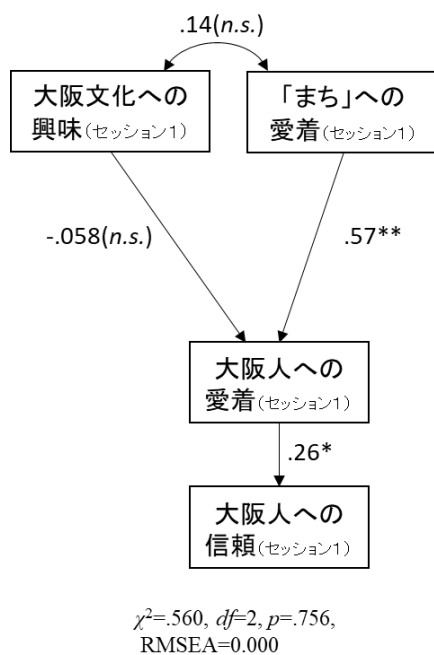


Fig. 5 大坂画壇鑑賞前の大阪人への愛着と信頼の構造方程式モデル(係数は標準化偏回帰係数)

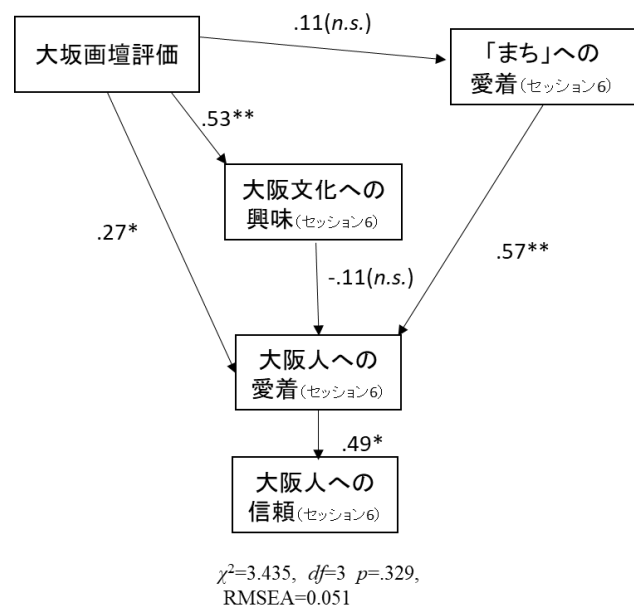


Fig. 6 大坂画壇鑑賞後の大阪人への愛着と信頼の構造方程式モデル(係数は標準化偏回帰係数)

セッション1では、「まち」への愛着は大阪人への愛着へ影響与えており、さらに大阪人への愛着が大阪人への信頼に影響を及ぼしていたが、大阪文化への興味と「まち」への愛着の間の相関、大阪文化への興味から大阪人への愛着へのパスともに有意ではなかった。

セッション6については、大坂画壇への評価から大阪文化への興味へのパスは1%水準で有意であり、大坂画壇を高く評価すると大阪文化への興味が高まることが示された。また、大坂画壇の評価から大阪人への愛着のパスも有意であり、大坂画壇を高く評価すると大阪人への愛着

¹² 以下の分析では、AMOS23を用いた。

が高まることも示された。「まち」への愛着、大坂画壇への評価から大阪人への信頼の直接のパスを検討した結果、いずれも有意ではなく、最終的に Fig. 6 に示すモデルを採用した。大阪人への愛着から大阪人への信頼の正の効果は 5%水準で有意であった。

4. おわりに

本研究では、地域文化資源として大坂画壇に焦点をあて、その鑑賞が大阪の「まち」と「ひと」への愛着に及ぼす影響、「大阪文化」への興味に及ぼす影響、そして大阪人への愛着を通して大阪の人への信頼に及ぼす影響を検討した。

大阪の「まち」への愛着に関して、大坂画壇鑑賞前後で有意に増加していたが、「大阪人」への愛着は増加していなかった。また、大坂画壇への評価は「まち」への愛着に影響を与えていなかった。つまり、大坂画壇という地域文化資源に触れることは、鑑賞者がその文化資源を高く評価するかどうかにかかわらず、大阪の「まち」への愛着を増加させていた。なお、調査で用いた作品には大阪の風景を描いた作品も含まれていたが、多くの作品は大阪の地を題材としたものではなかった。どのような作品が「まち」への愛着を鑑賞者に抱かせるのかについては、より詳細な検討が必要であろう。

次に、大阪文化への興味と大阪人への愛着に関して、大坂画壇鑑賞前後で大阪文化への興味は有意に増加していたが、大阪人への愛着はセッション1と6の間で変化がなかった。構造方程式モデルによる検討の結果、大坂画壇に対する評価は、大阪文化への興味と大阪人への愛着の両方に、正の効果を持っていたことから、単に大坂画壇を鑑賞することにより大阪人への愛着が増すのではなく、大坂画壇に対してポジティブな評価を抱いて初めて、大阪人への愛着が高まることが示された。

また上記の構造方程式モデリングによる分析では、大阪人への愛着は大阪人への信頼を生み出していることが示された。つまり、ここで示されたことは、地域文化資源への単純接触ではなく、その地域文化資源を地域にとって誇るべき素晴らしいものであると感じることは、その地域そのもの（「まち」への愛着）ではなくそこに暮らす人々への愛着を生み、さらにはそこに暮らす人々への信頼を生み出すということである。本研究では、毎回の調査実施時に、その回に鑑賞する作品の作家についてごく簡単な紹介をするのみで、作品の解説等はしていない。それにもかかわらず、鑑賞者が大阪人に対して愛着や信頼を抱いたという結果は、興味深いものである。しかし、地域文化資源への評価が地域と地域に暮らす人々への愛着と信頼に影響を及ぼすプロセスについては、いまだ不明な点が多く、今後より詳細な検討が必要であろう。

引用文献

文化庁，2011，「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次）について（答申）」，
文化庁ホームページ，（2017年6月1日取得，
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_10/toshin_110131

/) .

Hidalgo, Carmen. M. and Hernandez, Bernardo, 2001, “Place attachment: conceptual and empirical questions,” *Journal of Environmental Psychology*, 21, 273-281.

中谷伸生 2010 「大坂画壇はなぜ忘れられたのか——岡倉天心から東アジア美術史の構想へ」 醍醐書房

中谷伸生 2011 「大坂画壇の定義とその問題点」 関西大学文学論集 60(4), 1-19.

Payton, Michelle A., David C. Fulton, & Dorothy H. Anderson, 2005, “Influence of place attachment and trust on civic action: A study at Sherburne National Wildlife Refuge.” *Society & Natural Resources* 18(6), 511-528.

心理学辞典 1999 有斐閣

与謝野有紀・林直保子・草郷孝好 2015 『社会的信頼学』 ナカニシヤ出版

付記

本研究の実施にあたり、文部科学省の科研費(26590137:代表 林直保子)の助成を得た。